

釧路湿原自然再生協議会
第22回 森林再生小委員会
議事要旨

日時：令和4年10月18日（火）9：30～16：15

再生事業地視察 9：30～14：20

通常小委員会 14：30～16：15

場所：再生事業地視察 雷別地区自然再生事業地（川上郡標茶町雷別国有林）

通常小委員会 釧路地方合同庁舎5階 共用第1会議室

1. 開会
2. 議事
 - 1) 雷別地区自然再生事業の実施状況について
 - 2) 達古武地域自然再生事業の実施状況について
3. 閉会

再生事業地視察

【バス車内 合同庁舎～雷別】

●事務局

（挨拶及び自己紹介）

（配布資料の確認）

（進行にあたっての協力依頼）

資料に基づき説明

（資料：第22回森林再生小委員会現地検討会 資料表紙～2ページ）

（1. 本日のタイムスケジュール）

（2. 現地検討会位置図）

なお、資料3ページ目以降については、事業地や現地検討箇所の概要となるので、現地にてご説明する。

【事業地視察（笹地13D51）】

●事務局

（挨拶及び自己紹介）

ここは、釧路市から約50kmの標茶町の雷別地区という所の自然再生事業地で、本日は3

箇所、現地視察を実施する。

この場所はシラルトロエトロ川の源流部、釧路湿原の源流部に位置し、雷別国有林の293林班という地区である。ここの笹地1～14について、施業を2007年度、平成19年度から雷別地区自然再生事業実施計画に基づき進めている。

資料に基づき説明

(資料. 第22回森林再生小委員会現地検討会 資料3ページ)

(1. 雷別地区自然再生事業の概要)

ここは、元々広葉樹の山であったということで、実施計画でも生物多様性も勘案して、郷土の樹種、郷土の種で育てた苗木で生態系を維持しながら、生物多様性も維持しながらの回復を行っている。

資料に基づき説明

(資料. 第22回森林再生小委員会現地検討会 資料4ページ)

(1. 笹地13D51概要)

ここは、平成21年に標茶高校の湿原再生プロジェクトの生徒5名と先生1名でミズナラ、イタヤカエデ、ハルニレ、ヤチダモ、シラカンバ100本を植えていただいた。うち50本はツリーシェルター、保護管を付けなかったため、その木については、エゾシカとエゾユキウサギに食われ、ほとんど消滅してしまった。

当時は、ツリーシェルターを全部付けるということはしていなかったが、ちょうど設置したということで、かなりの部分が大きく成長して、イタヤカエデをはじめ、ヤチダモ等、かなり大きくなってきている。中には保護管が裂けてきているものもある。

資料の図で、黄色で表示しているのが保護管を取り外していきたいものである。令和2年度には2本取り外している。3年度については取り外していないが、今年度は保護管が破裂しそうになっている所は取り外しを予定しているところ。

この後、笹地11、10と向かっていくが、そこは植えてから数年しか経っていないが、将来的には雷別の広葉樹の成長が段々こういった状態になっていくと考えている。この取り外しの考え方、当センターとしても案は作っているが、委員の皆様にご意見をお聞かせ願えればといったところ。

(植栽地の中へ移動)

かなり大きくなってきて、青テープが付いているのが、保護管を外していこうと思っている木である。資料5、6ページに生育調査の野帳を載せている。

今後、こういった箇所が増えてくると予想しており、午後の小委員会で提示したいと思うが、根元径で7～8cmになったり、このツリーシェルター自体が約10cmくらいの太さしか

ないので、大きくなると裂けていくような感じである。

ただ、冬期の積雪が90cmくらいあって、早いうちに外すと、シカにやられたり、木そのものがツリーシェルターで形状を維持していることもあり、早くは外せないが、この目に見えているこういった木については、そろそろ外してもいいのかなといったところ。

ここの検討項目としては、資料10ページの今後の検討課題で13年経過しているというところである。成長状況に応じた保護管の取扱い、取り外し、現状維持とか、保護管の高さを超えた場合の取扱いについて、樹高は当センターとしては、3mを超えてきたら、胸高も直径3~4cmを超えてきたら外していいのかなと。根元径については、70~80mmくらいいけば外していいのかなといったところ。

今、SDGsや地球環境の問題があり、これは自然に戻らない素材なので、将来的には人の手で外していかなければならないということで、そのままにするのではなく、当然プラスチック製品なのでリサイクル、上手く使えるのはそのまま取り外して違う所で使ったり、破裂しそうになっているのはツリーシェルターとしては使えないような状況なので、きちんと洗ってプラスチックとしての再利用をしていくということで、これは全植栽地で共通の課題といったところである。

ただ、取り外しが遅れると、根元等に虫が湧いている所も出てきている。虫が入ってきたら樹幹もやられてしまうかもしれないので、早めに外して虫の発生を防がなければならない。せっかくここまで大きくなったので、そういったことも含めて委員の皆様から貴重なご意見をいただければ今後の施業に生かしていきたい。そういった状況である。

●委員長

ここは何年経っているのか。

●事務局

13年。2009年に植えている。

こういったのが約10,700本植えている。ツリーシェルターを付けているのが平成27年以降は6,700本くらい植えている。今後10年くらい迎える所が段々増えてくるので、こういったことに段々なっていくのであろうと。

次行く所も年数は経っていないが、保護管を飛び越えてきているものもある。今後そういった所が次々出てくる。せっかくここまで大きくなってきたので、シカにもやられないようにしながら、貴重な広葉樹なのでこれを次世代に繋いでいかなければいけない。使命であると感じていて、きちんと施業をしていけばこういった成長をしていく。自然の有り難みというものもある。

●委員長

これは、どのくらいの太さになったら外すとか、どうやって決めているのか。

●事務局

決めは無い。

●委員長

シカ害の問題ですよね。今まで外した個体は無いのか。

●事務局

ある。シカ害は受けていない。

ピンクテープを巻いたものや、その右側は外したものである。ここまで大きくなったらシカにはやられないと思う。

●委員長

まず、シカ害に遭わない高さとか、そういうので決めた方が良いのではないか。

破れているのは外していった方が良いのではないか。

●事務局

これは裂ける前に外さなければならぬかなと思っている。

●委員長

外すなり何なりしてはどうか。それをモニタリングして、シカ害に遭うかどうかで考えた方が良いのではないか。作業はしないのか、するのか。

●事務局

作業する予定。裂けたものがプラスチックの再利用で、裂けてないものは上手く外せば再利用する。

●委員長

耐用年数はどのくらいか。

●事務局

メーカーによると10年は大丈夫と聞いている。

●委員長

これは10年は経っていますよね。

●事務局

その通りである。なので、大丈夫なことは大丈夫である。

●事務局

柔軟性を保っているものが多々ある。

●事務局

それもどこまで使えるのかモニタリングしていかなければならない。

●委員長

できれば上手くどんどん外して行って、これくらいのもので樹皮なりなんなり食われるのかどうか。高さ的には問題無い。

●事務局

胸高で3~4cmくらいになったら。

●委員長

あの辺の感じ、自然に生えているものと同じ感じである。

●事務局

破けてきているのは外すのが遅かったと思っている。破けてきているのは虫が出てきている個体もある。

●事務局

根元径調査のために枝が支障となり保護管が上がらないので、過去に手で裂いた保護管もある。これは、プラスチックとして適切に処理するしかないと考えている。

●委員長

わざわざ保護管を壊してまで根元径を測ることはない。何らかの形で高さを決めて、この高さがいくつくらいになったら外すなり何なり基準を作って、基準が適切かどうかモニタリングして、シカ害に遭ったかどうかとか、そういう情報を積み上げていけば、外したら良いか決まるのではないか。

●事務局

植栽本数がかかなり増えているので、ある一定の基準で外して、今ご教示いただいた形での施業を進めていかないと。早めに外して行って、今後モニタリングしていかなければなら

い。

●委員

あの木はシカに食べられたのか。

●事務局

あの木は、保護管内部に水がたまっていた影響からか、保護管を外した直後から樹皮がふやけており、一部は裂けた状態だった。そのため、あのような状態となっている。

●委員

柵をしないとシカにやられてしまう可能性も考えないといけない。

●事務局

ハルニレは嗜好性が強い。ある程度太くなったら、保護管を外した後、試行的にシカネット等を巻くものと巻かないものの比較をやってみようと思っている。

とりあえず外してどうなるのか、シカに食われないなら、そのまま他の広葉樹と同様に育っていくのではないかと考えている。針葉樹も若干残っているので、針広混交林の山にしていければいいのかなと思っているところ。

ツリーシェルターも将来的には人の手で外していかなければならないと考えている。いつまでもプラスチック製品をずっと置いておけないし、酪農家の方からも「あれなんなんだべね」って聞かれたこともあり、リサイクルも含めて撤去していかなければならないと思うし、そういったことも含めながら山を育てていかなければならないと思っている。

生分解性の保護管は開発されているが、どうしてもプラスチックが下に落ちるといふか、全部土には還らない。紙製品でも探しているが、完璧なものはない。生分解性のプラスチックが今後においては一番良いかと思う。それも今後設置していこうと思っているが、結局下にプラスチックが残るところで完全には山には還らない。拾わなければいけない。山にしていくということで、ツリーシェルターの役割は果たしているが、将来的には撤去していかないとならないと思う。

今、委員長が言われた、ある一定の基準を決めて取り外していけば良いのではないかと聞いたところ。高さ、胸高だとか、外した後モニタリングをしていけば良いのではないかと。そういったことなので、裂けるようなものは早めに取り外すべきであるといったところ。そういったことを今後他の所もやっていくような形にしていきたいと思うし、調査するために壊して調べることは筋が違うのではないかとということで、取り壊してまで成長調査はやらないということで、今後は考えていきたい。委員長が言われたお話を参考に、今後この山づくりを進めていきたい。

(笹地 1 1 へ移動)

【事業地視察 (笹地 1 1)】

●事務局

資料に基づき説明

(資料. 第 2 2 回森林再生小委員会現地検討会 資料 2 ページ)

(1. 笹地 1 1 の位置説明)

ここは、雷別ドングリ倶楽部という森林ボランティアの方、札幌の企業の方の社会的貢献活動で令和 2 年度、3 年度、あと、平成 30 年度等に植えていただいている。

資料に基づき説明

(資料. 第 2 2 回森林再生小委員会現地検討会 資料 7 ページ)

(1. 笹地 1 1 の概要説明)

今いる所がゲート 2 の広場という所。

ここから先に進んでいくが、2 というのが 2 年度に植えた所、3A とか S というのは春植え、秋植えといった所。

ボランティアの方には、100 本単位で植えていただいている。平成 27 年以降、保護管まで設置した所では生存率 90%以上、ほとんど生きている。それが将来的には、先程の笹地 13 のような形になっていくと思う。

今後においては、成長に合わせて高さとか胸高がオーバーしてくれば、保護管の撤去も含めて成長を促していくということになるのかなといったところ。

(笹地の奥へ移動)

ここは、ボランティアの方とか企業の方とか、地域住民の方に植えていただいているという所で、成長している姿も見ていただいたりもしています。

●委員長

元とか 2 とか書いているのは令和なのか。

●事務局

令和である。S は春植え、A は秋植えである。

●委員長

最近のものか。

●事務局

そうである。3年度でここの植栽は完了した。

●委員長

周りに笹地があるが。

●事務局

昔は保護管を付けていないものが多かったので、防鹿柵で一旦くくって、シカを防いでから植えていこうと始めたが、28年以降は保護管で全て覆うんだと、シカにやられちゃうんだとなったが、その前は保護管を完全に付けていくという施業方法ではなかった。

平成27年以前は保護管を付けていないものが多かったので、シカとかウサギに7割以上はやられたというか、生存率は20~30%くらいしかなかった。

春を迎えたら彫刻刀で切ったように頭を食われているものがかなりあり、おかしいなと思ひ、自動撮影カメラを冬~春先に設置したところ、雪の上をウサギが跳ねていて、飛び出た頭を食べていたのを確認できた。

ウサギにも対応する、シカにも対応するといったら、保護管をやるしかないということになった。費用は掛かるが、下刈りしなくても良く、保護管をつけていないと笹に負けるというのもあるので、保育の経費も節減できるのはメリットとしてあるのかなと感じている。

素人目に見ると夏の暑い時に蒸れて枯れるんじゃないかと言われたことがあるが、意外と生存率が良い。90%以上生存している。

●委員長

今は、シカ柵はあまり付けないのか。

●事務局

そうである。今は全部に保護管を付けるようになったため。

●委員長

今は必要無いと。

●事務局

今は必要無いという感じはしている。

どうしても柵が壊れる所があるので、全部直していけばいいのだが、直しきれない所もあって、シカが入ってきている所もあるかも知れない。

今後、先程見たような感じに木が大きくなっていくと思う。この大きいものは2年しかたっていない。令和2年の秋に植えたのに、こんなに大きくなっている。なので、2、3年で

大きくなるものは2m以上、ツリーシェルターを飛び越えるのも出てきているので、効果的には結構いいのかなと感じている。

ただ、1本当たり1,500~1,700円くらい必要なので、ただ植えるよりはかなりかかり増しになる。ただ、付けなかったら食べられてしまうというのもあるので、やはりやらざるを得ないというか、それだけお金を掛けても、広葉樹の山を作るのであれば、やっていくことが大切なのかなと。

こっちの方だと、ほとんど木が無い。このままだと笹地のままなので、こういう中小径木、こういう木になってくれれば一番良いが、少なくとも、目の前にあるようなこれくらいの木、早く笹地の所にも回復していくというか、こういう残っている木は非常に貴重。母樹としても天然更新が図られるかも知れませんが、ここにある広葉樹、針葉樹でも、時代を引き継ぐということであれば非常に貴重な木で、ここまで大きくするのは並大抵ではない。こっちの方は全くの笹地の位置でしたわけですから、そこは、このような中小径木の広葉樹を増やしていく。科学的実証はなかなかできないが、釧路湿原源流部の山づくりにおいては、そのまま笹覆い地にするよりは、こういった広葉樹の山を少しでも増やしていくのは、将来的にわたっても重要なのではないかと。地域の住民の方と理解を得ながら山づくりを進めるのは、重要なのではないのかと感じている。

●委員

木が立ってないのは、前に植えてシカに食われた所か。

●事務局

その通りである。

次に行く所は、一回やられて補植した所がある。平成20年前半に植えた所は、保護管を付けずにそのままにしていたら、シカにほとんど食われ、再植付けをしなくてはいけない所も出てきて、非常に苦慮するというか、この地域で広葉樹を増やしていくためには、こういった手間暇は掛かるが、保護管を付けて進めるというのは大事なのかなと。

こうやってボランティアで植えてもらった木が、こんな風に大きくなってますということは報告していかなくてはならないでしょうし、しっかりと保全して育てていますよということは、当然ボランティアの方々に提示していかねばならないと考えている。

午後からの小委員会でもお話しするが、14箇所笹地があって、10箇所程度、大体7、8割程度は植え終わり、まだ3箇所くらい残っているが、着実に進めるというような形になると思っている。

こういったことで進めているという所を見ていただいたが、検討事項としては、柵の中と外で、今後保護管を外した時にどのくらいシカの食害に遭うのかとか、モニタリングする必要があるのかなと思っている。

ボランティアの方に植えてもらっているが、自然再生をやりたいという方が結構いらっしやるので、有り難いですし、今後においてもそういった方々に協力してもらいながら山づくりを進めていきたいと思っている。

●委員長

ドングリ倶楽部は何人くらいいるのか。

●事務局

今年は26名。毎年募集しているが、かなりの方に来ていただいている。今年に関しては、自然観察の方が人気があった。ただ、ドングリ倶楽部の方々は自然再生をやりたいという方が多いので、来年度は植樹を多くすることで進めていきたいと思っている。

真剣にボランティアの方々が考えてくれているのが有り難い。植樹も結構大変で、この保護管を運んだり、支柱を運んだり、普通ならただ植えるだけで良いのだが。

このツリーシェルター設置作業というのは結構重労働なので、これをボランティアの方でやっていただけるのは、非常に有り難いし、その行為を無駄にできないと思っている。

●委員長

これをやると下刈りはしなくても良いのか。

●事務局

その通りである。

●委員長

全体のコストとして、シカ柵で下刈りをやるのと、このチューブをやるのと、どちらがローなのか。

●事務局

今のところ調べたものが無い。もし、下刈りをやらなければ安いのではないか。

ツリーシェルター1本あたり1,500~1,700円くらい掛かるが、一度設置してしまえば、その労働コストは掛かるが、下刈りをずっと何年間もやらなければならないことと比べれば、ツリーシェルターの方が得なのかなど。生存率もかなり高く、下刈りが不要で効率は良い。

●委員長

シカ柵も使わなくて良い。

●事務局

活着率も良い。95%くらいの所もある。ほとんど生きている。

●委員長

費用対効果も出した方が良い。

●事務局

承知した。今、費用対効果のお話しも出たので調べていきたいと思う。生存率も良いので、有効なのかなと思う。

●発言者不明

下刈りは毎年やらなければいけないのか。

●事務局

下刈りは毎年やらないといけない。そのままにしていれば、笹に被圧されて枯れてしまうかも知れないので、笹を超えるまでやらないといけない。

●事務局

ちなみに、皆さんから見て右手側、昨年の秋に植栽した箇所だが、笹を地際まで刈ってから1年で笹がこのような状態になっている。

●事務局

笹の再生力がすごい。何もしないと笹で覆われて天然更新はかなり厳しい。

(笹地10へ移動)

【事業地視察（笹地10）】

この笹地10は、企業やボランティアの方に植えてもらった。今年は6月に植え、9月末、10月初めにも植えた。全部で300本程植えている。

今、歩道の右側が、最近植えた所。3年秋植え、4年の春植えで、その奥が4年の秋植え箇所である。この奥にも笹覆い地があり、今後はこの奥をやっていくということで、ここもあと2、3年くらいは、ボランティアの方とか地域住民の方と植えていくところ。

資料に基づき説明

(資料. 第22回森林再生小委員会現地検討会 資料9ページ)

(1. 笹地10要植栽箇所概要)

今年は、手前の赤く囲った所まで終わっている。奥の赤い所の前半の所まで植えている。面白いのは、平成 26 年に紫で囲った所。シカ侵入防止柵ということで、森林ボランティアのドングリ倶楽部の方々に作ってもらったが、防鹿柵の中の広葉樹はかなり大きくなっている。防鹿柵をちゃんとやれば、広葉樹が成長できるというのが見えるという所で、カバ等が生え、広葉樹が育っている。防鹿柵の中というのも、シカにやられないためには、広葉樹を守るためには一定の役割があるのかなと思う。来年度以降は奥の赤い所の続きをやろうと思っている。

●委員長

チューブの色の違いは何か。

●事務局

白いのが主だが、メーカー在庫の関係もあり、黄色を使っている箇所もある。色による効果の違いは無い。

●委員長

メーカーが言ってることか、そちらで調べられたことか。

●事務局

メーカーから色による違いは無いと聞いている。

●事務局

今年度に関しては、白いのは春に植えた所、黄色いのは秋に植えた所に使用している。

(笹地 10 奥へ移動)

この看板は、今年、若者の参加が少なかったが、参加者から寄せ書きしてもらったものである。ラミネートして、記念になるので、将来にわたって残さなければならない。成長についても報告しなければならないと思っている。

左側が平成 23 年～27 年くらいに植えた箇所。ツリーシェルターを付けずに植えた所が食われ、補植をしている。その頃は、全部ツリーシェルターでやるといった考えではなかったため、シカにやられてしまっただけの植え直しというか。ここは、防鹿柵は作っていなかった。

●委員長

このシカネットみたいなやつは風が通るのか。

●事務局

その通りである。

●委員長

いいとかなんとかということはないか。

●事務局

そこは調べていない。

●事務局

経過年数を考えると、シェルターから頭を出している木が少ない印象はある。

●事務局

ボランティアの方が設置したシカ侵入防止柵。この中に広葉樹が結構残っている。カバを中心に残っている。平成 26 年にボランティアの方が 100m くくったところ、広葉樹が残っている。

知床の方でも、くくった所は残っているが、くくってない所は植生を含めて食われるというか、やはりシカ防止柵を作れば、天然更新で広葉樹が食われないである程度育つという見本なのかなと思う。詳しく調べていないが、調べる必要がある。他の所から見たら明らかに広葉樹がある。

●委員長

シカは入らないのか？

●事務局

雪が降った時に飛び越える可能性はあるが、木は残っている。食痕は見られない。

一つの山づくりとして、ある程度地がきをして、最初に初期投資は掛かるが、費用対効果もあるが、母樹との位置関係にもよるが、状況の良い所なら、こういうやり方も小区画としては、やり方としてはあるかと思う。当時の状況にもよるが、こういった作りも天然更新の例としては使えないことはない。

●委員

ここは、天然更新できる所で、そういう風にすると言ってやったと思う。そういう地域を作ったと思う。細かいところはわからないが、思惑としては、話は聞いている。

●事務局

可能性があるということで作ったのだろう。ここは良い例だと思う。間違いなく広葉樹が残っている。他は皆、笹覆い地だが、ここは広葉樹が残っている。一つの指標にはなる。今後に生かせる可能性はある。

今後も笹地 10 の奥をやっていくということで、まだもう少し掛かるが、地道にやっていく。

時間になってきたので、現地検討はこれで閉会とする。

(再生視察地視察終了)

通常小委員会

●事務局

(進行にあたっての協力依頼)

(資料の確認)

(委員長への進行依頼)

【議事 1. 雷別地区自然再生事業の実施状況について】

●事務局

資料に基づき説明

(資料 1. 雷別地区自然再生事業の実施状況について)

●委員

現在植樹している樹木の育苗期間はどれくらいなのか。種子から発芽させて何年後などと時期を決めているのか。

●事務局

現在は標茶の業者より購入している。通常の育苗期間によると思われる。近郊で採取した種子を使っている。

●委員

育苗期間は通常の 5 年ぐらいと考えて良いか。特別なことはしていないのか。

●事務局

特別なことはしていない。育苗の専門家より購入している。

●委員

樹齢を考える際には、植林期間のほか育苗期間も考慮する必要がある。育苗期間は樹種によって違う可能性があるが、育苗期間が分からなければ正確な樹齢が出せないのではないかと。樹齢は、成長錐を抜いて測定することもできるが、育苗期間と植林後の年数が分かれば計算できる。

●事務局

育苗期間と樹種による違いがあるのかを苗畑を管理する業者に確認したい。

●委員長

確認してメーリングリスト等で教えてほしい。

●事務局

承知した。

●委員長

本日の再生事業地視察で、保護管を持ち上げて根元径を測っていると聞いた。高さが一定ならば保護管の高さでの直径を測定すれば良いのではないかと。保護管を剥がして測定することは今後検討した方が良い。

●事務局

今後の生育状況調査では、ご意見の通り実施する。

●委員長

保護管なしで自然に成長した樹木は、エゾシカによる食害で樹皮部分が剥がれている個体はかなりあった。保護管はできる限り長くつけておいた方が良く感じた。保護管が割れると再利用は難しいため、頃合いを見ながら外してほしい。外した後のエゾシカによる被食状況をモニターしてほしい。

●事務局

そういう観点で今後の調査を行っていく。

●委員長

保護管を使用した際は下刈をしなくて良いという話であった。防鹿柵を設置し、下刈りして植樹するという方法に比べて費用対効果がどの程度なのか、メーリングリストで教えてほしい。費用対効果が高ければ防鹿柵を作らなくても良いということになる。

雷別地区では計画の何パーセントの事業が終了したのか。

●事務局

約7割である。14箇所中10箇所程度が終了している。

●委員

資料では令和元年度の実施内容等でノウサギ食害対策というのが大きく取り上げられているが、どの程度の被害があったのか。

●事務局

被害の程度についてはお示しできないが、かなりの被害にあったと聞いている。春先と冬に自動撮影カメラを設置したところ、枝を食害しているところが撮影されている。

●委員

ノウサギ等の野生生物には、エゾシカやネズミも含まれているのか。

●事務局

そうである。

●委員

本日見学した雷別地区は傾斜が非常に緩い。達古武地域は上層木にカラマツがあり、傾斜が急で雷別地区とは状況がかなり違う印象を受けた。資料で紹介があったリモコン式の草刈機等、寒冷地で使える機械を使って効率的な森林施業を行うことは非常に重要なことである。今後も森林管理局に情報共有をお願いし、達古武地域で有効な手法を取り入れていきたい。

●委員長

リモコン式草刈機は急斜面でも使えるのか。

●事務局

25°程度の傾斜でも使えると聞いている。

●委員長

25°程度の傾斜で利用可能であれば、達古武地域でも使える可能性がある。

今後、情報交換をしてほしい。

企業のCSR活動として協力してくれた会社名を宣伝してはどうか。

●事務局

西松建設である。積極的に CSR 活動を行っている。そういった企業が増えるのはとても有り難い。

●委員長

どのような関係の会社なのか。

●事務局

建設業、建設関係である。

【議事 2. 達古武地域自然再生事業の実施状況について】

●事務局

資料に基づき説明

(資料 2. 達古武地域自然再生事業の実施状況について)

●委員

資料 15 ページ、L の沢、C の沢の上流でウチダザリガニが捕獲されなかったのは、天然堰が侵入の障壁となっている可能性があるという話であった。天然堰の高さはどれぐらいなのか。

●委員

30cm 程度だと聞いている。

●委員

その落差をウチダザリガニは登れないのか。

●委員

絶対登れないということではない。登る可能性はあるが、現時点では登っている個体は見られなかった。ウチダザリガニの生息の有無についてより明確にするのであれば、上流区域での環境 DNA 調査をするしかないと思う。

●委員

我々は他の場所でウチダザリガニの侵入をどのように防ぐか検討している。30cm 程度の落差を越えれないとなると対策がとても楽になる。ウチダザリガニの侵入防止対策にその情報は有用である。

●委員

森林による炭酸ガスの吸収源対策、生物多様性を求められるなどの国全体の事業がある中で、苗の生産技術が下火になっていくことはとても残念である。今後、30by30、OECM に関する場面で生物多様性に貢献するために、今後も苗を供給するというような計画は無いのか。

●事務局

OECM に登録された土地に対して、環境省の苗木を提供していくというような具体的な動きは無い。

●委員長

OECM については、まだどういうところを指定するのかなどの詳しい情報が得られていない。しかし、各企業が登録に向けて動いており、北海道大学でも研究林を OECM として登録したいと言っている。

30by30 では、国立公園の範囲を広げるだけではなく、民地をどういう形で保護地として認めていくかという施策であり、全国的にそのような方向性が高まっていることは事実である。また、全国的に 30%の保護区を作ることに OECM がどれだけ貢献できるかということがある。しかし、OECM には森林だけではなく他の生態系も含めるため、そこで苗木生産技術が使われるかは未知数である。

一方で、次期の生物多様性国家戦略では「劣化した生態系の何パーセントを再生する」という目標を立てるようである。それには、どこが劣化しているのかを評価し、どのように再生するかを考える必要がある。ここで行っている森林再生も該当すると思うため、苗木生産で貢献していくことはあり得るかもしれない。

この度環境省が尽力し、釧路市、標茶町に対して苗木を供給してくれた。これは稀なケースであり、他の自治体の持つ土地である場合に、どこまでこういうことを広げていけるか、法的、制度的な縛りも含めて検討していかなくてはいけない。

●委員

釧路市では、10月3日にゼロカーボンパークの取組みとして植樹祭を行うにあたり、環境省より森林再生の苗木を頂戴した。釧路火力発電所に主催として全面協力いただき、環境省と釧路市との共催として行った。今後、企業からの要望があれば、随時、別途相談させていただきたい。

環境省は達古武地域森林再生事業が本務だが、その中でご提供いただけるものを、私共が企業に中繋ぎさせていただき都市型森林再生を進めたい。

ゼロカーボンパークの大きな目的の一つに、地域の皆さんに森林再生と再生事業の意義を知っていただくということがある。取組みの一環として、興津小学校へ赴き、雷別地区、

達古武地域で行われている森林再生事業の意義や湿原保全の意義を児童生徒の皆さんにお話しした。

●委員長

折角軌道に乗ってきた苗畑を維持し、環境省所管地の自然再生事業の実施地域だけではなく、その他自治体の取り組みに対してもある程度供給していこうという方向性は持っているが、どこまで可能なのかを今後検討する必要がある。

また、ゼロカーボンの推進は全省庁に渡り大事なテーマでもある。気候変動と自然再生をどう結び付けるかは、この釧路湿原自然再生協議会全体で議論する必要がある。一つは緩和策としてCO₂を吸収するという。もう一つは適応策として、自然再生を推進することことで、防災・減災にどの程度寄与できるかということ、改めて評価するというのも大事なテーマである。

達古武地域の一つの大きな問題は、上層木のカラマツを、どのように広葉樹に転換していくかということ。カラマツを伐採する際には、下層の広葉樹の損傷が懸念される。

一緒に現地を見学した林業試験場道北支場長の明石氏からは、ある程度問題の無い場所ではカラマツを伐採し、成長する樹木が林冠を構成できるようにした方が良いのではという意見もあった。しかし、成熟したカラマツ林で広葉樹が林冠層を形成するすぐ近くまで伸びている事例もある。そのため、現状のままにカラマツを残置するということもあり得る。

ただし、留意点として、そもそも不良・不成績造林地であって林冠層にあるカラマツとほぼ同じ初期の時期に広葉樹が入っており、それが現在のカラマツと変わらないサイズまで育った可能性もあるため、見極めが必要だということも議論した。また、架線集材による運搬の話も出たが、北海道に技術者がいるかは不明である。

●事務局

第22回森林再生小委員会を閉会とする。

(終了)